コラム　特別支援教育に関わる職員の現場の声

教育課程研究協議会　特別支援教育（伊那北小学校）午後の分科会参加者から

小学校　自閉症・情緒障がい特別支援学級

・取り組みについて
コグトレなどを取り入れて、本人が自分でできたという経験を積んでいる。ノートを事前に預かっておいて、ノートに今日行う学習問題を作っておく。SST 要素の詰まった学習プリントを使っている。どんな内容でも褒めて認めていく。該当学年の学習は、穴埋め式、キーワードで。自分でできた達成感を味わえる学習内容を。児童それぞれに合った学習内容と学習時間を。自己肯定感を高めることが将来につながっていく。

・自立活動
少人数の中にいるときも自己表現ができるように工夫を。集団でできるもの、積み上げ、協力、責めないルールづくり等を構築していく。子どもの興味から自立活動の活動内容を据えていく。

・自閉症・情緒障がい特別支援学級で１日過ごしている児童への対応の仕方は
原学級。支援学級それぞれのルール作りを個々に。最後に本人の楽しみを据え、長期的な部分でトークンを取り入れながら、日々の積み重ねを見える形にしてためていく。授業に集中できない児童への対処の仕方に悩む。児童の人数が多くて対応に苦慮している。個別に関わる時間が少なくなってしまう。動物を飼い、心の安定につなげた。

・保護者と児童の思いのずれに対して
保護者と連絡を取り合う。行事の参加の仕方など積極的に。本人は保護者の思い（できるだけ原学級で学習してほしい）はわかっているが苦しい。親の思いだけでなく、本人の困り感をどう伝え、理解していただき、支援していくか。

・原学級から自閉症・情緒障がい特別支援学級へのつなぎ方
他県では、籍は原学級にない。原学級は交流および共同学習。国語と算数で利用しているので塾（学力を上げるための学級）と捉えられてしまう。支援学級で一番大事な自立活動ができていない。

・ICT 利用に関して
ルール徹底が難しい。児童とともに取り組みやすいルール作りをしていく。

小学校　知的障がい特別支援学級

・生活単元学習について
模型のお金で買い物をする活動（算数・社会・図工・自立活動・道徳的要素も含め）。販売活動（実生活で活かすことのできる要素を含む）⇒売上金で校外学習、クリスマス会などの行事を楽しむ。公共の場に出る経験（１人で入浴する等）をシュミレーションしたり実際の場に行ったりして行う必要がある。子どもたちのやりたいという気持ちを大切にするとともに個々の教育課題をリンクさせていきながら学習を組み立てることの難しさ。

・自立活動
自閉症・情緒障がい特別支援学級との合同で行う。個々の興味と課題をリンクさせ自立活動を行う。

・原学級との連携や支援員配置の難しさ

中学校　自閉症・情緒障がい特別支援学級

・進路に関して
高校、特別支援学校、就労、家居。通信制高等学校に入学しても継続していけるが課題。（学費が高い、学習内容等）⇒本人のレベルに合ったコースを選べる高校もある。高校卒業後の選択肢については、特別支援学校は就労の支援が手厚いが、自閉症・情緒障がい特別支援学級入級の生徒の受け皿が少ない。

通級指導教室・日本語指導教室・弱視特別支援学級・病弱特別支援学級

・ことばの教室・ＬＤ等通級指導教室について
ことばの教室・ＬＤ教室との情報交換をして、分担している。時間を設けて課題の優先順位を決めて重なり合わせて指導している。はっきり区分することは難しいので、連絡を取り合って連携していくことが大事。

・弱視特別支援学級・病弱特別支援学級と原学級の指導について
なんでも皆と同じにやりたい本人の気持ちに寄り添っている。原学級での活動が多いので、間に自立活動を入れている。看護師や松本盲学校の先生と連携して指導している。

・小中高のつなぎ方について
小学校と違って、中学校は周りの生徒からの支援が受けにくい。教科担任制になって、困った生徒が出てくる。支援会議が必要となる。事前に通級の説明会を行う市町村もある。高校入試に合理的配慮が必要になる生徒は、１年生のうちに先を見据えて話をしていく必要がある。高校見学に行く生徒もいた。色々な情報があれば、選択肢が増える。木曽は発達支援センターが情報発信をしてくれる。

・担任、保護者、通級指導教室担当者の連携
担任、保護者、通級指導教室担当者が連携すると児童生徒が伸びていく。工夫して教材を作ってクラスで使えるようにしている。学校での学習が家庭でも生かされたり、クラスでも現れたりしていく。それを共有して褒めることができる。必要な支援全員が使えるようにしておくことが大事。高学年になると自己選択ができるようになる。

このように現場で日々児童生徒に関わる先生方より多くの声が聞かれました。良い実践に学び、課題は１人で悩まずの、同じ仲間で語り合い、共に子どもたちのために前を向いて取り組んでいきましょう。

特別支援教育だより　第３８号　発行：上伊那圏域特別支援教育連携協議会
上伊那郡特別支援教育研究連盟

○○（まるまる）上伊那

令和６年２月９日

自分らしく生きられるために

本校での話になりますが、七久保小学校の特別支援学級こすも組とみなみこま組では、二学期末、自分たちが育てた大根を使ったおでん作りと販売活動を行いました。大根の収穫から始まり、おでんの作り方調べ、チラシ作りなど、準備の段階でも学ぶことがたくさん。そして、おでんを作る場面では、手順を考えたり、算数で学習したこと（形、かさ、計算など）をフル稼働させたり、さらに販売時には、相手とのやりとりやおつりの計算などなど。おでん作りを通して、子どもたちは、満足感や自己肯定感を高めながら、たくさんのことを学んでいるのだということを、あらためて感じることができました。笑顔いっぱいに生き生きと取り組む子どもたちの姿を見ることができたことが、何よりも嬉しいなと感じる自分でもありました。各校でも、今年一年、こういった子どもたちの姿がたくさん見られたのではないかと思います。子どもたちの学びや生活をつくってくださっている先生方に、心より感謝致します。

さて、話は変わりますが、１１月、長野県教育委員会人権教育派遣事業講師長野県ヘルプディレクターの猪又竜さんと井出今日我さんにご来校いただき、人権講演会を実施しました。猪又さんは、生まれたときからの心臓の病気のため、多量の薬を飲み行動も制限されています。井出さんは、5歳のとき「筋ジストロフィー」を発症し、現在車椅子生活で首から下は動きません。このお二人から、「誰もがありのままに幸せに暮らせるにはどうしたらいいか」をテーマにお話を伺いました。特に、心に残っていることは、「おれは助けてもらわねえと生きていけねえ自信がある」という「ワンピースのルフィー」が言った言葉を取り上げて、『あんなに強いルフィーでも、仲間に助けをもとめ支えてもらっている。自分たちもいろんな人に支えてもらったり、反対にいろんな人の力になったりしながら日々を送っている。ありのままの自分のことを自分で知り、助けてほしいことがあったら「助けて」って言える人になってほしい。その声に耳を傾け互いに認め合い、助け合い、支え合える、地域や社会であってほしい』と語られたことでした。私たちは、誰でも、できないことや苦手なことや不安なことがあります。何とかしてほしいと思ったときに「助けてほしい。」と声に出せる、そして、その声に耳を傾け、互いに助け合い支え合える、そんな学校や社会であることが、一人ひとりが自分らしく生きていくために大事なことだと、心から思いました。最後に、『すべての人が自分らしく生きられる社会を共につくっていきましょう』と結ばれました。これは、私たち大人の大きな役割だと感じます。

年が明け、令和6年はどんなことがあるんだろう、と思っていた１月１日に発生した「能登半島地震」。多くの方がお亡くなりになり、被災され今もなお避難されている多くの皆様がいます。お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げたいと思います。通常とは違う生活の中で、身体も心も憔悴し、どうしたらいいか分からず「助けて」「助けて」と叫んでいるだろう皆様に、自分がいったい何ができるのか。この地の皆様が、自分らしく生きられる日が少しでもはやく訪れるように、自分が今できることを考え、実行していきたいと思う毎日です。そんな中でも学校が再開され、子どもたちの元気な声が聞こえてきているという報道に、ほっとされられています。令和6年度が、すべての子どもたち、すべての皆様にとって、少しでも明るい年になりますよう、子どもたちの笑顔がたくさんみられますようにと願います。

有賀　和美（七久保小学校）